

水田における子実用とうもろこし栽培技術(第2報)

1 背景・目的

近年、家畜濃厚飼料の主原料である子実用とうもろこしの国内生産が注目され、水田を活用した戦略作物としても期待されている。第1報で、本県では RM100^{*}の早生品種の利用が適している結果を報告した。引き続き、早生品種についての品種選定及び、水田での栽培を調査する。

※RM(相対熟度): 早晩性を示す指標。100~早生、115~中生、135~晩生。

2 技術のポイント

- (1) RM100 の早生3品種を5月下旬に播種した結果、P9400 は子実の乾物収量が多く、かつ乾物率が高かった (図1)。
- (2) 水田において P9400 を栽培した結果、乾物収量は前年作付した早生品種 (RM114)と同程度となった(図2)。
- (3) P9400 は、収穫時の子実水分が15%程度となり、収穫物への茎や穂軸等の夾雑物の混入がほとんどなく、普通型コンバイン(YH700M ヤンマー、写真)による収穫作業の効率が高まった(表1)。

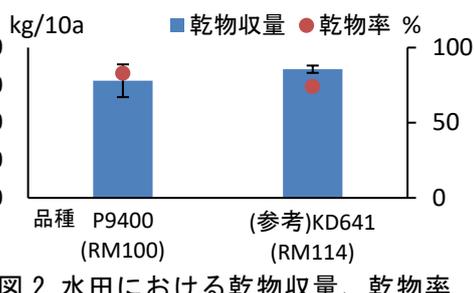
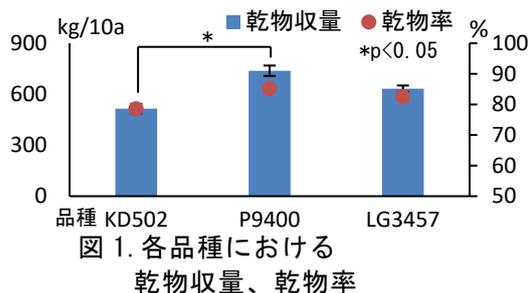


表1. 収穫物の比較

	P9400(RM100)	(参考)KD641(RM114)
収穫日	R3.9.28	R2.10.28
子実水分	15%	25%
刈取時間	13分16秒/10a	30分26秒/10a
収穫物		



写真. 収穫の様子

3 成果の活用と残された問題点

- (1) 子実用とうもろこしの播種・収穫は大豆と同様の作業機を利用可能であるが、収穫時に専用のアタッチメントが必要となる。
- (2) RM100 の早生品種の作付は、収穫時の台風被害や気温の低下を考慮し、5月下旬から6月上旬までに播種する。
- (3) とうもろこしは湿害に弱いため、水田において栽培する場合は、排水対策の実施が必要。
- (4) アワノメイガによる虫害については、とうもろこし 7-8 葉期に殺虫剤(BT 剤、MEP 乳剤)を散布することで、抑制できる。